

巻頭言

産業アーキテクチャの時代におけるビジネスモデル

田中 謙司

日本ビジネスモデル学会 会長

技術革新やそれに伴う提供価値が進化する時代において、その技術をいかに社会実装し経済的・社会的価値へと転換するかは企業経営上重要になってきています。本号のテーマである「産業アーキテクチャ」は、まさにそのための俯瞰地図であり設計思想であるといえます。

価値は、企業、顧客、サプライヤー、スタートアップ、大学、自治体、金融機関、規制当局など、多様な主体の相互作用から生み出されるようになりました。ビジネスモデルは企業単体の設計図から、多数の主体が参加する「N 対 N」のエコシステム設計へと進化しています。競争の単位も企業対企業からエコシステム対エコシステムへと移りつつあります。

こうした環境のもとで問われるのは、個別技術の優位性だけではありません。どの主体と連携し、どの領域を競争領域とし、どの領域を協調領域とするのか。どのようなルールやインターフェースを設計し、データや知識を流通させるのか。そして、そこから持続的な価値創造と価値獲得を実現できるのか。こうしたアーキテクチャ設計能力こそが、競争力の源泉となっています。

本号で取り上げた秋季大会では、「技術を価値に転換する産業アーキテクチャ」をテーマに、システム間連携がもたらす産業構造の変化、調理のデータ化による新産業の創出、サーキュラーエコノミーを支えるビジネスモデル、イノベーションエコシステムの形成など、多様な事例が紹介されました。さらに研究発表では、SAF 市場の形成やクロスドメイン協業など、複数の主体による価値創造のあり方が議論されています。いずれも、技術そのものではなく、それを取り巻く関係性や制度、データの設計が価値創造を左右することを示しています。

ビジネスモデル研究もまた、新たな段階を迎えています。企業内部の収益構造を分析するだけでなく、多様なステークホルダーが共創する価値ネットワーク全体を対象とし、その設計原理を探究することが求められています。産業アーキテクチャの時代において、ビジネスモデルは企業の設計図から社会の設計図へとその対象を広げつつあります。

本号が、読者の皆様にとって未来の産業と社会を構想する一助となれば幸いです。